

## 乳辱宇宙開拓史 前編

……人類が、無人ではなく有人で太陽系を離脱することができたのは、西暦に換算して二五二〇年のことである。月面都市に本部を置く「外宇宙開発機構」の技術陣が、人類初となる恒星間宇宙船「アトランティカ」の開発に成功し、アルファケンタウリに向けて進発したのだ。船長リシュト・バーグ以下二五名の隊員が、外宇宙に入植可能な新天地を発見すべく、人類の期待を一身に背負って冥王星前線基地を出発したのは、宇宙暦二二二年二月二二日、地球標準時刻で午後二時二二分のことである。この当時、地球がもはや立ち行かない状況に陥っているという事実は、生まれたばかりの赤ん坊以外であれば、誰もが等しく共通の認識として承知しているところであった。宇宙船アトランティカ号の発進は、その状況を打破するための、いわば人類にとって最後の一手だったのである。

二十一世紀初頭から本格的に開始された宇宙開発は、民間企業の参入と人工知能の発展に伴って、希望に満ちたプロジェクトとして加速度的に進歩した。二十二世紀に入って月面に都市が建設され、火星への入植が進むと、人類は自分たちがまったく新しい歴史を刻み始めたことを大いに喜んだ。その足元では、人口の爆発的增加、慢性的な食糧不足による致死性飢餓の蔓延、地球の資源枯渇、破

滅的な環境汚染、貧富の拡大、そして先進諸国と発展途上国間における競争の激化など、各種問題が悪化の一途を辿っていたが、この頃はまだ、見て見ぬふりができていた。

各種問題が、一斉に大規模爆発を起こしたのは、二三世紀に入ってからだった。コーカサス地方における些細な地域紛争が、大国の関与や巨大軍需企業の暗躍といった紆余曲折を経た挙句、世界の各地に争いの火種となって飛び火して、最終的には熱核兵器の応酬へと発展し、全地球規模での大量殺戮がおこなわれたのだった。これにより、五〇億人が一瞬で死滅し、その後、一五年という時間をかけて三〇億人が放射能によって緩慢な死を余儀なくされた。無傷で残った大地は皆無に等しかったが、それでも五億人が様々な理由で生き残り、月面都市の力を借りて再出発を図ることになったのである。

地球の近くにありながらも、月面都市が破壊を免れた理由は、人類の理性が働いたからでも、奇跡がおこったからでもなく、ただ単純に都市防衛機能が優れていたからに他ならなかった。常日頃から隕石衝突という危険に晒されていた月面都市には、レーザー砲や電磁レールガンなどの各種防衛装備が十分に配備されており、それらが飛来する核ミサイルを適宜迎撃していたのである。

月面都市には人類のあらゆる最先端技術が保管されていた。これが無傷で残ったことは、人類にとって不幸中の幸いであったという他ない。もし、月面都市

が核戦争の余波を受けて滅んだとしたら、人類は放射能で汚染された地球で緩慢な絶滅を迎える他なかったからだ。現にこの時、地球からの物資運搬が途絶えた火星植民地では、食料や燃料の自給が追い付かず、悲惨な内部抗争の果てに、二万人を超える移住者が全滅してしまっていた。

人類は荒廃した地球を回復させるため、約一世紀の間、除染と浄化の回復作業に尽力したが、人類の英知を尽くしても、一度完全に破壊されてしまった地球環境を元に戻すことはできず、かくして人類は視線を宇宙へと向けることになったのであった。西暦二二九八年より、宇宙暦元年と公式で呼ばれるようになったのは、陰鬱なる未来を少しでも明るくしようという人類のささやかな願いによるものであった。

時代は宇宙開拓時代へと移行した。これまで、地球回復のために費やされていた各種労力は、そのまま宇宙開発へとつぎ込まれるようになり、火星への再入植、小惑星帯における資源開発、木製の衛星タイタンでの基地建設など、各種事業が次々と実施され、それらが成功を収めると、人類は次第に自信を深めていき、ついに外宇宙への進出を考えるようになる。その目的は「第二の地球」を発見することであった。

宇宙暦一五五年、外宇宙開発機構が設立され、その一〇年後に冥王星に前線基地が建設された。外宇宙への進出にあたっては、ワープ航法が非現実的である以

上、限りなく光速に近い速度が出せる宇宙船の開発が必須であり、そのため、外宇宙開発機構の技術陣は、人工知能をフルに活用しながら、試行錯誤の末、人類初となる恒星間宇宙船「アトランティカ」の開発に成功したのだった。

この宇宙船「アトランティカ」には、船長リシュト・バーク以下、選りすぐりの隊員二五名が乗り込み、「第二の地球」を発見するために、アルファケンタウリに向かって出発した。地球から四・三光年離れたこの恒星の付近には、観測と無人探査機による調査によって、環境が地球によく似た「ラブデイル」という惑星が在ることが判っており、今回の有人探査では、調査の最終段階として、実際に人が住めるのかを確かめるべく、一種の「人体実験」として、二六人の「実験体」を送り込んだのであった。

およそ六年という年月をかけ、宇宙船「アトランティカ」は、目的地であるラブデイルに到着した。そして地球標準時間で半年に及ぶ現地調査をおこなった末、船長リシュト・バークはラブデイルの地表に降り立つと、仲間たちの目の前で率先して宇宙服を脱ぎ、大きく深呼吸をしたのだった。

「ほのかに甘い……しかし、素晴らしい空気だ！」

それが、彼の感動の感想であった。

リシュト・バークに続いて、他の隊員たちも続々と宇宙服を脱ぎ、ラブデイルの空気を吸った。そしてみんな笑顔で、歓びを爆発させながら、二酸化炭素が入

り混じった空気を吐いたのである。これが、後に悲劇を招くことになるとも知らずに。

度重なる調査の末、惑星ラブデイルには、ウイルスやバクテリアを含めて、固有となる原住生物は生息していないことがほぼ確実視されていた。観測でも、無人探索機の調査でも、そして現地での有人調査でも、「地表」や掘削可能範囲での地中には、生物の痕跡が確認されなかったからである。しかし、ラブデイルに生物はいたのだ。地上ではなく、地下の奥深くに。

隊員たちが宇宙服を脱いでしばらく経った時だった。突然、地面が激しく揺れ出した。

「な、なんだ、地震か………?」

だが、それは地震ではなかった。

大地が激しく揺れた直後、地面が割れ、その中より、突然、醜惡な色合いと形状をした巨大なワーム状の物体が、奇声と共に飛び出してきたのである。

「キシャアアアアアアアッ!」

「な、な………っ!」

それはまごうことなき生物であった。それも、造物主の悪意を具現化したような怪物で、化け物と呼んで差し支えない姿形をしており、それが巨大な口を開けながら身をくねらせる様は、まさに現実化した悪夢と呼ぶにふさわしい光景だ

った。

その怪物が、啞然とするアトランティカの隊員たちに頭部を向けたかと思うと、彼らを次々と襲いはじめたのである。感動は瞬く間に悪夢に代わり、一帯が阿鼻叫喚の地獄と化した。

「うわあああああああああッッッ！」

「た、助けてくれえええええええッ！」

「く、食われるッ！ 食い殺されるうッ！」

「ぎゃあああああああああッッッ！」

悲鳴が上がり、絶叫がほとばしる。隊員たちは必死になって逃げまわったが、ひとり、またひとりと食べられ、飲み込まれていき、ついには船長のリシュト・バークも犠牲になってしまった。

この襲撃で一三人が捕食され、四人がどうにか逃げ延びることに成功し、アトランティカで待機していた他の仲間たちによって救出された。生き残った一三人は、突然の事態に困惑しつつも、このまま調査を続けるべきか、それとも一度帰還するかを話し合った末、冥王星前線基地へ帰還することを決めた。惑星ラプデイルにあのような巨大で狂暴な生物が生息すると判っては、長期滞在調査もままならないと判断した結果だった。

「外惑星で、人間が無事に「呼吸」できると判っただけでも、今回の探索は大成

功だ。これは歴史的な快挙といえる。そうだろう。なあ？」

そう自分たちに言い聞かせるようにして、生き残った隊員たちは惑星ラブデイルを後にした。それは無念の想いに後ろ髪を引かれつつの帰郷であった。

宇宙船アトランティカが冥王星前線基地を出発してから一三年後、人数を半分に減らした状態ではあったが、彼らが無事に太陽系に帰還すると、一三人の帰還者は人類の「英雄」として歓呼で持つて迎えられた。

そして惑星ラブデイルにおける現地調査の結果が報告されると、人類は歓喜に沸き、すぐさま惑星ラブデイルに調査隊の第二陣を送り込むべきという声望が強くなり、それは会議の席において、具体的なプランをもって提出されると、満場一致での承認決定が下されたのであった。

もちろん、惑星ラブデイルの原住生物たる謎の巨大で狂暴な生物に関する情報はいかと伝えられたが、「危険であれば駆逐すればいい」という意見が大勢を占め、さしたる脅威とはみなされなかった。この頃はまだ、目に見える巨大生物よりも、ウイルスやバクテリアなどの目に見えない脅威の方が危険視されていたため、現地調査によってそれらの脅威が皆無であることが確認されると、人類はそれだけで惑星ラブデイルが「楽園」に思えてならなかったのである。

宇宙船アトランティカが帰還してから三年後、アトランティカの後継機たる宇宙船「クリハルバル」が惑星ラブデイルに向かって出発した。第二陣となる調

査隊の人数は一二〇人で、そのうち約七割が現役の軍人で占められており、最新の兵器も多数搭載されていた。このことから、今回の調査に危険生物の「駆除」が含まれていることは、誰の目からも明らかであった。

宇宙暦二三九年、宇宙船クリハルバルが惑星ラプデイルに向かって出発し、宇宙暦二五二年、人数を二人にまで減らして戻ってきた。人類はむろん、驚き、そして衝撃の事実を知った。

惑星ラプデイルに到着した調査隊の第二陣は、さっそく地中に潜む巨大生物を駆除すべく行動を開始した。最初は地中探索レーダーを使って生物を捕捉しようとしたのだが、地中に巨大な「岩盤らしきモノ」が在ると判っただけで、巨大なワーム状の生物を見つけることはできなかったのである。しかし、隊員のひとりが感動を抑えることができずに宇宙服を脱いで呼吸をしたところ、地面から巨大なワーム生物が出現したため、コレと交戦状態におちいった。どうやら、このワーム生物は、人間が排出する二酸化炭素に反応するらしいことが、この時、判明したのだった。

ワーム生物との交戦は、最初から総力戦でおこなわれた。人類側は持ち込んだ最新兵器を総動員して「駆除」に努めたが、やがて次から次へと出現するワーム生物に圧倒され、劣勢に追い込まれた末、壊滅を余儀なくされた。生き残った隊員は、クリハルバルに残っていた一四名と、どうにか地上からの帰還に成功した



七名の、計二一名だけであつた。

調査隊第二陣の壊滅の一報が太陽系全体に伝えられると、惑星ラブデイルは「希望の星」から「失望の星」へと評価が一転し、そしてそのすぐ後に編成された第三次調査隊が惑星ラブデイルに向かって進発し、「情報」をもって帰還すると、惑星ラブデイルは「恐怖の星」という印象が強く持たれるようになったのであつた。

調査隊の第三陣が太陽系に帰還したのは宇宙暦二五六年のことである。宇宙船「ルーシャン」が冥王星前線基地を進発した時、調査隊の人数は一五二人であつた。そして帰還した時、その数は増しており、一五五人に増えていた。これは途中で女性隊員が妊娠し、出産したからではない。調査隊の第三陣が惑星ラブデイルでワーム生物と交戦した際、その体内から排出された「犠牲者」が救出されたからである。それは調査隊の第二陣に参加していた女性隊員たちであつた。「こ、これは………いたい、どういふことなのだ………？」

第三次調査隊のメンバーが驚き、なおかつ困惑したのも無理はない。ワーム生物の体内から排出された三名の女性隊員たちは、なんと生きていたのだ。食べられたと思われてから、実に一三年以上もの間、ワーム生物の体内で生きていたのである。ただし、無事ではなかつた。

彼女たちは脳に深い損傷を負つて発狂した状態になっていた。さらに身体が

異常な変貌を遂げており、特に乳房が、恐ろしいほど肥大化していて、乳首にあたる部分にはぽっかりと穴が開いており、そこからドロドロとしたマヨネーズ状の母乳を滴らせていた。そしてその穴からは、そのマヨネーズ状のドロドロとした母乳を、強引に吸乳した形跡が確認されたのであった。

だが、真に驚愕すべきは他にあった。なんと、救出された彼女たちは、肉体的な変貌は見られたものの、容姿は行方不明になった時とまったく同じで、さらには遺伝子に劣化が見られず、科学的には一歳も年を取っていないことが判明したのだ。これはいつたい、どういうことであろうか。

「彼女たちの身に……いつたい、何があったのだ……？」

戦慄した第三次調査隊は、すぐさま太陽系への帰還を決めた。惑星ラブデイルに生息しているワーム生物は、もしかしたら自分たち人類の想像を遥かに超越した存在かも知れず、これ以上、むやみやたらに調査を続けても、いたずらに犠牲者の数を増やすだけな気がしてならなかったからだ。

帰還した第三次調査隊の隊長クリストファー・レッセンは、五八七ページに及ぶ報告書を作成した後、次のような言葉でそれを締めくくった。

「……もっと詳しく、特にこのワーム生物、命名「シュドメゾーア」に関しては、より詳細な調査をする必要があると考えられる。惑星ラブデイルに安全かつ確実に人類の入植を進めるためには、禁断の方法を用いる他ないのかもしれない

いが、それでもこれ以上「人」の犠牲者を出すことは、可能な限り回避されるべきである。人類が「禁忌」とした技術の解放と運用を、真剣に検討すべきである」

報告書の提出を受け、外宇宙開発機構は会議を開き、今後の方針を模索した。

そして、惑星ラプデイルに派遣する調査隊の第四陣では、報告書でも提示されていたように、人類が「禁忌」としてきた技術を投入することを決定したのである。これは後に「シンディ・シンクレア計画」と名付けられた。

計画名の由来は、被験者として選ばれた外宇宙開発機構のエリート隊員であるシンディ・シンクレアに由来する。彼女の年齢は二〇歳。性別は女性。太陽系随一と噂されるほどの美貌の持ち主で、高い身体能力と強い精神力を誇り、知識と技術と度胸を兼ね備えた、まさに才色兼備を絵に描いたようなエリート中のエリートたる人物である。また、乳房が平均水準よりも大きいことも選出された理由のひとつとされた。これはワーム生物の体内から救出された女性隊員たちが、乳房を執着的なまでに弄られ、改造されていたことから、彼らの習性に人間の女性の乳房がなんからの刺激を与えているのではないかとの推測からであった。

かくして宇宙暦二六〇年、「シンディ・シンクレア計画」が発動された。宇宙船「グラマラス」にシンディ・シンクレアの遺伝子情報と、電子化された記憶情報、それに多数の超小型式自立稼働偵察ドローンが搭載されて、惑星ラプデイル

に向けて進発した。

これは、惑星ラブデイルにて、ワーム生物「シュドメゾーア」の習性と生態を調査するために、消費物として扱われた、哀れな女性「たち」の物語である……。

\*

……惑星ラブデイルの地表に、一隻の小型宇宙船が着陸した。船体には外宇宙開発機構のエンブレムが描かれており、その中から、ひとりの人物が降りてきた。全身を銀色の宇宙服で包んでいるが、尻や、特に胸の部分が大きく膨らんでいるため、この人物が女性であることは疑いようがなかった。

彼女の名前は「シンディ・シンクレア」という。外宇宙開発機構に所属するエリート隊員で、着用している宇宙服の背中には「1」という番号が刻まれていた。その番号が何を意味するのか、実は、着用しているシンクレア本人はまったく知らない。

「ここが……惑星ラブデイルなのね……」

右に、左に視線を向けながら、シンクレアが感慨深げな声を発した。見渡す限り石と岩しかなく、遠くに薄っすらとなだらかな山が見える以外は、延々と荒野が広がっているだけだ。地表の色彩が薄っすらと青いのは、ラピスラズリという

鉱物を含んでいるからである。

ひと通り周囲を見渡した後、シンクレアがゴクリと喉を鳴らした。それから、彼女は先ほどとは異なる口調で言葉を続けた。

「ここに、棲息しているのね……人類の希望を打ち砕き、恐怖に陥れた怪物――宇宙生物シュメゾーアが……」

そのおぞまじき名前を口にした瞬間、シンクレアの緊張の度合いが一気に高まったようだった。

シュドメゾーアという名詞は、この惑星ラプデイルを訪れる者にとっては「恐怖」や「悪夢」と同等の意味合いを持っている。そもそも「シュドメゾーア」という名前自体が、二十世紀に書かれたコズミックホラーに登場する「宇宙生物」の名前をもじって付けられたモノであるからして、最初からその名前に「危険性」を伝える「警告」の意味合いが含まれていることは明らかであった。

惑星ラプデイルの原住生物たるシュドメゾーアが、人類にとって危険な生物であることは明らかだ。それは被害を受けた第一次、第二次調査隊の惨劇を見れば判ること、この碧い惑星を、人類の「第二の地球」とするためには、是が非でもその危険性を排除しなければならないところであった。とはいえ、その生態は不明な点が多く、地下に棲息し、狂暴にして強大で、人体が排出する二酸化炭素に反応するということ以外は、ほとんどまだ何も判っていないに等しい。第二

次調査隊が持ち帰った肉片のサンプルによって、シュドメゾアが地球生物とは異なる遺伝子情報を保有していることも判っているが、あまりにもかけ離れ過ぎているため、解析しても実情は「なにも判らない」に等しいままであった。

シンクレアが、自らに課せられた役割を再確認するかのよう、周囲を見渡しながらまた呟いた。

「わたしに課せられた使命は、シュドメゾアの生態を把握すること。そのためにはまず、彼らが何処にいるのか知る必要があるわね」

自分の意思で言っているにも関わらず、まるで誰かが考えたような台詞を口にしながら視線を地面へと向けるシンクレア。彼女が視線を向ける先のどこかに、調査対象の宇宙生物が生息しているはずだ。

シュドメゾアは、普段は地中で生活していると思われる。そのため、地上からは彼らが何処にいるか把握することは難しい。地中探索レーダーを使っても、惑星ラプデイルの地下には、なにか巨大で硬い「岩盤らしきモノ」があるため、ワーム生物であるシュドメゾアの地下生息域を特定することは至難だ。

しかし、シュドメゾアは人体が排出する二酸化炭素に反応するという習性が判っているため、おびき寄せることは可能と思われる。ただし、その方法は、自分の身を著しく危険に晒すことに繋がるが、シンクレアはそれでもそれを実行に移せるだけの気概と勇気を持ち主であったため、躊躇いはなかった。もちろん

ん、彼女が気づきもしないような、他の理由も介在していたが。

「一度呼吸をし、シウドメゾーアをおびき寄せた後、ヘルメットを着用してすぐに身を隠す。そしてシウドメゾーアが開けた穴へ偵察用ドローンを投入し、その生態を把握する。よし！」

やはりまた、まるで誰かが考えたような台詞を繰り返した後、意を決したシンクレアは、おもむろに着用していたヘルメットを外した。ふたつに分けられた青くて長い髪の毛が外気に触れ、次いで彼女の容姿が露になった。卵形の輪郭、ツンと小さく高い鼻、花卉のような美しい唇、そして宝石のような瞳。太陽系随一の美貌と言われる評判に、嘘偽り無い容姿だった。

ヘルメットを脱ぐなり、シンクレアは大きく息を吸った。

「すう……」

ほのかに甘い空気が肺の中全体に広がる。シンクレアはその空気をしっかりと堪能した後、吐き出した。

「はぁ……」

その動作を何度か繰り返す。シウドメゾーアが現れるまで。

しかし、それほど長い時間は必要としなかった。

ゴゴゴゴゴゴ……

突然、地中の奥深くで地鳴りが生じたかと思うと、ぐらぐらと大地が揺れ始め

た。地震のような突き上げる揺れ方であったが、それが自然現象ではないことをシンクレアは承知していた。

「もう察知したの？ 早いわね……」

シュドメゾーアの探知能力の高さに驚きつつ、素早くヘルメットを着用し、自分が乗ってきた小型の宇宙船に乗り込もうとする。一時的に上空へ避難するためだ。

しかし、次の瞬間だった。

「ギシャアアアアアアアアッ！」

大地を割って、地中より、巨大なワーム生物が出現した。シュドメゾーアだ。恐ろしいほど巨大で、おぞましいほど醜悪な姿をしており、もしなんの心構えもない者が目にしたならば、その恐ろしさのあまり、失禁してしまったり、あるいは失神してしまうかもしれない。

シュドメゾーアの登場と同時に、シンクレアの両眼が大きく見開かれ、顔の表情が驚愕の色で染まった。ただし、彼女が驚いたのは、シュドメゾーアの登場によるものではなかった。

「嘘！ そ、そんな……！」

シンクレアの目の前で、自分が乗り込もうとしていた小型宇宙船が宙を舞い、そして次の瞬間、地面に叩きつけられた。強い破碎音が響き渡り、震動が地面を



走った。

シュドメゾーアの登場は、シンクレアの想定通りだった。予想外だったのは、地中から登場したシュドメゾーアが小型宇宙船の真下から現れたことである。その結果、必然というべきか、当然というべきか、天高く舞い上がった小型宇宙船は、地面に叩きつけられると同時に無残に破壊されてしまって、シンクレアは逃げる術を失ってしまった。

「くっ……！」

この不測の事態に、シンクレアはギリツと歯を噛みしめた。だが、彼女は茫然としたり、あるいは自失したりといった、隙を見せるような真似はしなかった。すぐに状況を切り替える判断を下すと、脱兎のごとくその場を離れ、身を隠せる場所を探して駆けだした。その足はとても速く、宇宙服を身に着けているにも関わらず、陸上短距離選手を彷彿とさせるものがあつたが、悪化した事態はさらなる悪意を持って彼女に襲いかかってきた。

ゴゴゴゴゴゴ……。

再び地鳴りが生じたかと思うと、地震が発生したかのように地面が揺れ、割れ砕けた。そして、シンクレアの目の前に、二匹目となるシュドメゾーアが出現したのである。

「ギシャアアアアアアアアッ！」

「くう………ッ！」

次から次へと出現する災厄に、シンクレアはまたもやギリッと歯を噛みしめたが、それでも彼女は絶望したりはしなかった。すかさず腰に装着していたレーザー銃を抜き放つと、それをシュドメゾーアに向けて引き金を引いたのだ。

ピーッ！

赤い光線が放たれ、シュドメゾーアの胴体を貫いた。

「ギシャッ、ギシャギシャギシャアアアアアアッ！」

効果があった。レーザー光線で撃たれたシュドメゾーアは、身体に丸い穴を開け、身をくねらせてもがき苦しんでいる。

「いまだっ！」

シンクレアは走った。

しかし、災厄は続く。

ゴゴゴゴゴ………。

三度地鳴りが生じたかと思うと、今度は広範囲に渡って地面が砕けた。そして、一度に数匹のシュドメゾーアが姿を現したのである。

「ギシャアアアアアアッ！」

「ギシャシャシャアアアアアアッ！」

「ギギシャアアアアアアッ！」

「そ、そんな……ッ！」

これにはさすがのシンクレアも絶句するしかなかった。そして、にわかに動きが止まった。

その瞬間だった。

「ギシャアアアアアッ！」

後ろから咆哮がして、シンクレアの視界が真っ暗になった。

「し、しまった……ッ！」

シンクレアは、自分がシュドメゾーアに食べられたことを知った。そして、そのまま強い肉の圧迫を受け、意識を失ってしまったのだった。

……この時、極小サイズの自立型偵察ドローンが、彼女と一緒にあってシュドメゾーアの体内へと潜り込んでいったのだが、そのことにシンクレアが気づくことはなかった。

………続きは本編でお愉しみてください